

研究所プロジェクト「アジア境域における跨境的生活様式の研究 東アジア・東南アジアの比較」

著者	松本 誠一 ほか
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	47
ページ	258-234
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004431/

トランスナショナル・コミュニティ研究班 報告

研究所プロジェクト（第2年次）

アジア境域における跨境的生活様式の研究
——東アジア・東南アジアの比較——

Studies on Transnational Way of Life in Asian Peripheries :
Comparative Perspective of East Asia and Southeast Asia

代表 松 本 誠 一

I 研究班の構成・目標

1. 班名称：トランスナショナル・コミュニティ研究

2. 代表者：松本誠一

3. 構成員：

研 究 員：井沢泰樹，植野弘子，後藤武秀，小林正夫，長津一史，水谷裕佳，山本須美子，
渡邊暁子

客員研究員：井出弘毅，大畑裕嗣，金 東光，小澤康則，末成道男，宮下良子

4. 概 要

当研究班が目標とするのは、東アジア・東南アジアを主な対象として、そこにおける個別エスニシティ（民族性）の調査、および文化接触・文化変容の研究を推進すること。また、アジアの人々の移動と移動先での定住化および受け入れ社会での葛藤・同化の状況、アイデンティティの様相を明らかにすることである。このために、文化人類学・社会人類学・教育人類学・環境人類学・宗教人類学・法人類学・法制史・人文地理学・共生社会学・市民社会論・俗信研究・高等教育論・植民地史などの専門分野の研究者がそれぞれの視角から研究し、学際的に協力して複雑なアジア社会文化の解明に寄与したい。

当研究班では研究所プロジェクト「アジア境域における跨境的生活様式の研究—東アジア・東南アジアの比較」を抱えている。プロジェクト・メンバーは研究班メンバーの一部で構成し、また所外研究者の協力も得ながら遂行している。研究班メンバーの研究業績をみると、今後もあるこれコラボレーションする企画を構想できるので、実現に向けて運んでいきたい。

II 研究所プロジェクト（井上円了記念研究助成金「研究の助成」共同研究）

1. 概要

「アジア境域における跨境的生活様式の研究——東アジア・東南アジアの比較——」

《研究期間》2011（平成23）年4月～2014（平成26）年3月

《研究代表者》松本 誠一（社会学部教授）

《研究分担者》井出 弘毅（アジア文化研究所客員研究員）

植野 弘子（社会学部教授）

後藤 武秀（法学部教授）

小林 正夫（社会学部教授）

長津 一史（社会学部准教授）

宮下 良子（アジア文化研究所客員研究員）

山本須美子（社会学部教授）

《研究経過》

平成23年度（昨年報告した分の続き）

（1）1月24日～26日 下関市，福岡市調査

井 出 弘 毅

（2）1月28日～31日 下関市調査

宮 下 良 子

（3）3月17日～21日 香港，中国深圳市調査

後 藤 武 秀

平成24年度

（4）8月8日～16日 韓国・巨済島，釜山市調査 松 本 誠 一・井 出 弘 毅

- | | | |
|----------------|-----------|---------|
| (5) 8月26日～28日 | シンガポール調査 | 山 本 須美子 |
| (6) 9月2日～4日 | 下関市調査 | 宮 下 良 子 |
| (7) 9月16日～20日 | 韓国・釜山市調査 | 宮 下 良 子 |
| (8) 10月14日～15日 | 静岡市で研究会共催 | 長 津 一 史 |

2. 調査・研究会の報告

各調査・研究会の概要は以下のとおりである。《研究経過》の日付順に記載するが、宮下客員研究員の概要は一括して(2)に(6)(7)も合わせて掲載する。

(1) 下関市、福岡市調査

アジア文化研究所 客員研究員 井 出 弘 毅

期 間：2012年1月24日～26日

出張先：下関市、福岡市

2011年夏にも調査に訪れた下関において、在日コリアン男性のインフォーマントからの聴き取りを中心に調査を行なった。

調査日程は以下の通りである。

1月24日

空路北九州空港に入り鉄道にて下関に向かった。在日コリアン男性が住職を務める仏教寺院光明寺にて寺院の沿革、本堂内に安置されている力道山木像の由来、下関の在日コリアンについてなど聴き取り調査。またパンフレット等の資料を入手。その後下関市立図書館にて文献調査。

1月25日

下関国際旅客ターミナル、民族団体の下関支部、シーモールなどを巡訪。

在日コリアン男性からの聴き取り調査。

1月26日

昨日の聴き取り調査の際に教えて頂いた、ポッターチャンサ（担ぎ屋さん）が拠点としている商店を確認してから、かつての在日コリアンの集住地域の1つを巡訪。

今回の調査の目的は、報告者が以前関釜フェリー（下関と釜山間を結ぶ国際フェリー）内にて偶然出会った在日コリアン男性からライフヒストリーを聴き取ることである。またそれに加えて、下関という海外への玄関口でもあり、特に韓国との関係も深い場所における在日コリアンの生活について実際に見て知ることを主眼とした。

まず初日に訪れた光明寺（写真①）は大韓仏教曹溪宗の宗教法人である。寺は在日コリアンの集住地域にあり、すぐ近くには民族学校もある。寺は元々1938年に福岡市にて創建され、1948年に下関に移転、1982年に現在のK住職が韓国より派遣された。1984年に力道山木像（後の宮下良子氏報告の写真1を参照）が光明寺に移転された。移転の経緯については、木像は北九州市の在日コリアンが弟子として所有していたが、事業の危機により保存できなくなったため、当人と力道山夫人が韓国人として韓国の寺院にとの要望があり、安置されたとのことであった。その後何の連絡もないことからそのままになっているということである。現在は本堂に安置されている。最近では韓国

からも見学に来るとのことであった。近年檀家の数が少なくなったとはいえ、下関における在日コリアンの結節点の1つである。

下関市立図書館では現地の書籍を中心に調査した。昨年ワークショップを開催した東亜大学の崔吉城氏による未見の書籍もあった。

翌25日には、国際旅客ターミナルにおいて韓国からの旅客の様子を観察した。昨年の調査時とほぼ同様、ポッタリチャンサの姿はなく一般の旅行者のみであった。その後港からは少し離れた民族団体の支部に赴き、ポッタリに関する情報などについて尋ねてみた。特にこれといった成果は入手できなかったが、研究者がよく訪れる拠点であるため何人かの知人の名前を聞いた。

インフォーマントのA氏は60歳代である。まだ物心がつかない幼い頃に家族と共にマサン（馬山）からコジェ（巨済）島を経由して、日本の淡路島に辿り着いた。淡路島を目指した理由については不明である。その後、下関に移動して現在に至る。下関では様々な職業（自営業）を経たが、父親のビジネスの成功を継いでやがては宿泊業で成功し、現在仕事は息子に任せている。A氏の父親は韓国釜山にあるIT関係の高校の理事長を務めており、A氏自身も理事の1人である。その高校の卒業式に理事として出席するための関釜フェリー内でたまたま船室が一緒になり報告者と出会った。今でも月に3回は関釜フェリーにて釜山に行っている。これまでかなりの回数このフェリーに乗っており、一時期はポッタリの親分と友人になったことから、いつもは安価な2等船室の雑魚寝をしていたのが、その親分の口利きで1等船室に泊まれたことも何度もあったとのことである。A氏の父親は息子にも来日した背景についてほとんど語ろうとはしないらしいが、今後A氏からは在日コリアンの暮らしについて、より詳細な話を聴くことが期待できる。またポッタリについても、その変遷をずっと見てきていることから、今後の協力が期待できる。今回は数少なくなったポッタリさんたちが拠点としている店舗を教えて頂いた。今後聴き取り調査をしていきたい。

最終日には福岡に移動して在日コリアンの集住地域の1つを再訪した。島村恭則氏の先行研究によると、福岡周辺の在日コリアン集住地域はそのほとんどが集合住宅化や移転によりなくなる寸前とのことであった。その中でも唯一残っていたN駅近くの集住地域を再訪した。ここには昨年個人研究でも1度訪れている。先行研究の地図によると、N駅の近くにNキムチの店があったが、現地において確認したところ、店のあった建物にはS町に移転した旨の張り紙があった。今回再訪したところ、建物自体がなくなって整地されており（写真②）、かつての店のあった国道沿いから1本入った道沿いに新しいキムチの店ができていた（写真③）。その店員によると、2011年12月15日からNキムチの店のオーナーの弟さんがこの新店のオーナーとなり、その奥さんが店長を



写真① 光明寺



写真② 元Nキムチの店があった場所。整地された向こう側に新しい店の裏側が見える。

やっており、この場所でキムチを作っているとのことであった。元のNキムチの店は国道の歩道拡張工事による立ち退きのためS町に移転したとのことであった。かつては国道沿いにもう1軒別のキムチ店があったが、そちらの店も同じ道沿いの1ブロック向こうで営業中であった（写真④）。わずかに残っていた在日コリアンの集住して生活をする場のほとんどがなくなっていたが、キムチという食べ物の商売といういわゆるエスニック・ビジネスが残存することを確認した。



写真③ 新しい店の前景



写真④ 隣のブロックのキムチ店

（文・写真 井出弘毅）

（2）（6）下関市調査

（7）韓国・釜山市調査

「下関市の在日コリアンおよび韓国・釜山市における日本からの帰還者を対象とした聞き取り調査」

アジア文化研究所 客員研究員 宮下良子

《調査概要》

2011年に開始された研究所プロジェクト「アジア境域における跨境的生活様式の研究—東アジア・東南アジアの比較」研究の2年目にあたる本調査は、前年度同様、下関と釜山の境域にまたがるコリアンたちの生活誌／史の収集の継続を目的とした。ただし、本報告では、前年度に実施した（2012年1月実施）追加調査の報告も加筆している。

まず、下関におけるコリアンのライフヒストリー収集では、「強制連行を考える会」の代表者たちの協力により、下関市最大のコリアン・コミュニティである神田町の住民への聞き取り調査が可能となった。また、かつて小規模のコミュニティが形成されていた東大和町に居住しているコリアンへも聞き取り調査を行った。今回の調査では、神田町および下関駅前のコリアタウンである竹崎町周辺を「強制連行を考える会」の代表者たちの案内でフィールドワークできたことも大きな収穫であった。

次に、日本から釜山へ帰還したコリアンたちへの聞き取り調査は、昨年実施した釜山に拠点を置く「通訳会（仮名称）」のメンバーを中心とした。その理由として、通訳会のメンバーは前回の報告でも述べたように70～80歳代の方々が50名ほどはいるので、彼／彼女らの話を伺うことで量的調査が可能となるからである。今回は、通訳会の会長にコーディネートしてもらい、会長を除く9名の方に話を伺った。昨年実施した聞き取り調査の人数は8名なので、今回のインフォーマントを合わせると17名の帰還者のライフヒストリーを収集したことになる。また、昨年に引き続き今回も日本からの帰還者を中心として聞き取りを行ったが、通訳会のメンバーには帰還者ではないコリアン

たちも含まれており、今後は彼／彼女たちへの聞き取りも実施したいと考えている。それは帰還者のみの語りだけではなく、帰還者ではないコリアンの視点を加えることで、より帰還者たちの立ち位置が韓国社会の中で相対化できると考えるからである。

また、前回の報告では日本在住の経験があり、第二次世界大戦前後に海峡を越え、釜山に帰国したコリアンたちを「引揚者」と称したが、松本誠一氏の助言および日帝強占下強制動員調査を実施しているヨンサン大学の崔永鍋氏の指南により、本報告では「帰還者」と改めている。

《調査期間》

2012年1月28日～31日、9月2日～4日、9月16日～20日

出張先：下関市、韓国・釜山市

《調査スケジュール》

下関市：

1月28日

北九州空港から下関へ向かい、下関駅で「強制連行を考える会」の代表者Pさん、その関係者である下関市在住のKさんと待ち合わせる。両者と強制連行で渡日し、現在下関市の神田町に居住するG氏への聞き取り調査の打ち合わせをした後、Pさんの車で神田町のデイケアサービス施設へ向かう。その施設は2012年1月に同町に設立された高齢者向けの民間施設であり、そこにGさんが通所しているということで、施設の協力を得て聞き取りを行った。Gさんは1925年生まれの87歳の男性で、1943年に金剛丸で下関に上陸した後、栃木県の黒部へ夜行列車で移動する。その後、下関に定住し、朝鮮学校の創立に関与する。また、Gさん以外の在日コリアン、あるいは日本人の通所者たちにも少しだけ話を伺った。聞き取り調査後、Pさんたちと神田町の視察を行う。

1月29日

滞在ホテルから神田町にある在日コリアン寺院の光明寺へ向かう。曹溪宗で修行した住職は1951年生まれの61歳で、1982年くらいに渡日する。前住職がいなくなり、その後寺を再建する。下関市における在日コリアン寺院は光明寺のみであり、その役割は重要である。また、2006年ごろにはNHKの「ゆく年くる年」の中継として取材を受けたということだ。(写真1)

1月30日

かつて小規模のコリアン・コミュニティがあった東大和町に現在も居住しているMさんに聞き取りを行った。Mさんは1942年生まれの70歳の女性である。京都で生まれ10歳のころ知人を頼り、母親ときょうだいで下関に移り住む。その後、関西に行き、結婚後下関の東大和町に定住する。Mさんへの聞き取りを行った後、再び神田町のデイケアサービス施設を訪ね、その施設の設立の経緯を伺い、そこで働いている40～50歳代の在日コリアンの女性たちへ聞き取りを行う。それから再度、筆者一人で神田町のコリアン・コミュニティおよびコリアン系食堂



写真1 光明寺の力道山の木像



写真2 神田町のコリアン・コミュニティ



写真4 竹崎町



写真3 かつてのし尿収集場



写真5 長門市場の建増しされた集合住宅

が並ぶ竹崎町周辺を巡回する。(写真2, 3, 4, 5)

1月31日

午前、北九州空港に向かい、東京に戻る。

9月2日

北九州空港からJR田川後藤寺駅に向かい記録作家の林えいだい氏の自宅兼アラン文庫に伺う。筆者が大学院生のときから交流がある林氏に強制連行および下関―釜山の関連から話を伺った。それは、来年度に予定しているこれまでの調査、研究の成果をまとめるべく資料、文献の収集を想定した上で、当該地域のコリアンの歴史的経緯に詳しい林氏に研究上のアドバイスをいただくためである。さらに、その後、下関市で下関市立大学の木村健一氏ともさまざまな情報交換を行った。また、関連資料もいただいた。(写真6)



写真6 林えいだい氏



写真7 やすもり



写真8 下関港国際ターミナル



写真9 ポッタリ・チャンサの荷物（囲みの中）

9月3日

竹崎町で焼肉店「やすもり」を経営している在日コリアン男性T氏の事務所に伺い、聞き取り調査を行う。T氏は同地域以外にも焼肉店を持ち多角的に事業を行い、ここ数年衰退している竹崎町商店街を中心とした街おこしを模索している。また、親が炭焼きを生業としていた在日コリアンR氏にも聞き取りを行う。その後、下関国際ターミナルへ行き、釜山へ戻るポッタリ・チャンサ（担ぎ商売）の女性たちや釜山へ観光のために行く広島在住の原爆体験をした90歳の在日女性に話を伺った。その一方で、日韓語学研修のために出発を待っている日本人大学生たちがおり、少し話を聞くことができた。（写真7，8，9）

9月4日

午前、北九州空港に向かい帰路に着く。



写真10 釜山駅



写真11 通訳会会長夫妻

韓国・釜山市：

9月16日

金海空港に到着したのが午後4時を過ぎ、あいにく台風16号の影響で釜山市内の天候は悪かったが、報告者の宿泊先ホテル（釜山駅のすぐそば）にて、今回の釜山調査のコーディネートを担っていただいた釜山の通訳会の会長夫妻に出迎えていただいた。そして、今回の調査のスケジュール確認をし、会長夫妻ともに日本からの帰還者であることから、さっそくお二人から聞き取りをさせていただいた。（写真10, 11）



写真12 釜山税関博物館で展示されている関釜連絡船の写真

9月17日

滞在ホテルのロビーにてAさん（1930年生まれ、82歳女性）への聞き取りを行う。あいにく、この日は台風上陸ということで風雨が激しい中、会長夫妻も同席してくださった。その後、昨年、共同調査を行ったヨンサン大学の崔氏と釜山税関博物館へ行く。（写真12）

9月18日

釜山市南区図書館にて4名へのインタビューを行った。まず、Bさんは1926年生まれで、86歳の男性である。10歳のときに家族で渡日し、1945年4月に釜山へ帰還。Cさんは1927年生まれで、85歳の女性。日本で生まれ、結婚後、1945年3月に釜山に帰還。Dさんは1938年生まれで、74歳の女性。日本で生まれ、東京の浅草で育った。戦中は日本人に預けられ、1946年に先に帰還していた父親が日本に残っていたDさんを迎えにきて共に釜山へ帰還した。Eさんは1933年生まれで、79歳の女性。日本で生まれ、名古屋で育った。1945年10月に釜山へ帰還。（写真13, 14）

9月19日

19日は、滞在ホテルロビーにて、3名のインタビューを行った。まず、Fさんは1927年生まれで、85歳の男性。日本で生まれ、福岡県門司市で育った。1945年5月に釜山へ帰還。Gさんは1932年生まれで、80歳の男性。大阪市大正区で育ち1946年に釜山へ帰還。Hさんは1928年生まれで、84歳の



写真13 釜山市南区図書館



写真14 通訳会の講義室

男性。Fさんとは親戚であり、同じく日本で生まれ、福岡県田川市で育った。1945年12月に釜山へ帰還。

聞き取り調査後、東亜大学の崔仁宅氏の研究室へ伺い、研究上のアドバイスをいただいた。

9月20日

金海国際空港から成田空港へ帰着。

《成果と課題》

本年度は、昨年の課題であった下関市の在日コリアン・コミュニティ住民への聞き取り調査が実施できたことおよび、韓国、釜山市における日本からの帰還者たちへの聞き取り調査が継続できたことが収穫であった。下関市に関しては、同地域に一寺院しかない在日コリアン寺院「光明寺」の形成過程、ならびに現在の地域における役割等についても詳細な話を伺うことができた。かつては朝鮮系住民が多数を占めていた最大のコリアン・コミュニティであるこの地域（神田町）に、現在は韓国系や日本人の混住が見られる。同時に住民の高齢化が顕著であるゆえ、できるだけ早急に調査を継続したいと考えている。また、新しい動向として2012年1月、同町に高齢者向けの民間のデイケアサービス施設が設立されたが、コリアンに限らず同町の高齢者にとってセンター的役割を果たす可能性を包摂している。これらの動きへの注視とともに今後は、前回の報告でも課題として述べたように、下関市の歴史自体も視野に入れ、地域社会の中でどのように在日コリアンおよびコミュニティが併存しているのかを社会的な視点で考察する必要があるため、今後は資料収集にも努めたい。

また、韓国、釜山の調査については、先述したように新規9名の日本からの帰還者へインタビューを行ったが、これまでの下関調査の関連も含めて、現時点での雑駁な見解としては、「韓国に帰還できたコリアン」のほとんどはある程度の財産があり、韓国本土に帰る場所あるいは親類縁者がいたということがまず前提にあったようである。そして、彼らの世代のほとんどが日本で教育を受け

ており、それを糧にかなりの人々が韓国社会では公務員や教員となる事例が多い。引き続き、聞き取り調査を継続し、さらなるデータ収集により、コリアンの移動の動態を検討したいと考えている。

(文・写真 宮下)

(3) 香港、中国深圳市調査

アジア文化研究所 研究員 後藤 武 秀

期 間：2012年3月17日～21日

出張先：香港、中国深圳市

中国の経済発展に伴い、香港に隣接している深圳市は、多様な人々が集まり経済活動を展開する中国有数の大都会となっている。改革開放政策により中国最初の経済特区として位置づけられた同市は、1970年代末までは人口4万人ほどの漁村と農村からなる町であった。ところが改革開放により外資導入の道が開かれると、香港に近接していることもあって、香港経由の資金が流れ込み、今では人口1400万人の大都会へと変貌している。今回の訪問調査では、このような歴史を有する深圳市に集まる中国系の人々の同郷組織を中心に調査を行った。調査には深圳大学法学院の蔡元慶教授の助力を得た。

3月17日、10時発の航空機で香港に到着、到着後直ちに深圳市に移動した。すでに夕刻であったので、蔡教授に到着の旨電話連絡し、翌日面談することとした。

3月18日、日曜日ではあったが、午前11時に蔡教授と面談、今回の訪問目的に沿った調査協力を依頼する。蔡教授とはすでに度々共同調査を行っており、また度々調査の援助をお願いしている関係なので、スムーズに予定を立てることができた。午後、蔡教授及び本学の卒業生である崔錦花女史と共に黒龍江省出身の朝鮮族の同郷会を訪問した。朝鮮族の同郷会は、それぞれの出身省、出身市ごとに組織されており、運動会や懇親会など様々な行事を行っている。深圳市が改革開放により工場立地を進めたときに、同市近郊からだけでは十分な労働者を確保できなかったことから、東北部の寒村からの労働者の移住を積極的に進める政策を取ったことから、黒龍江省や吉林省といった東北地方からの移住者が多数居住するようになった。その中でも朝鮮族は、お互いに言語の共通性、文化の共通性といった点から同郷会を組織し、積極的に同郷及び朝鮮族の同胞の支援に当たっている。

3月19日、午前11時に日本商工会を訪問する。深圳市の日本商工会はようやく法人格を許可されたばかりの団体である。中国政府は、1か国につき1つの商工会を認可するという方針をとっている。日本商工会の場合は北京にある日本商工会のみが認可を受け、法人格を認められていた。その結果、上海や広州といった大都市のしかも日系企業が多数存在する地域においては、法人格を有さない形で商工会が運営されている。しかしこれでは例えば会費の納入に対して必要経費としての手続きを取ることができないなど不便が多かった。深圳市の日本商工会はこの点の改善を要求してきたが、ようやく各国商工会が入居するオフィスビルに入居することを条件に法人格が与えられるようになった。中村事務局長にこうした点について話をうかがった。昼食を共にして、さらに同市に於ける日系企業の問題点や日本人社会の問題点などについて話をうかがうことができた。

3月20日、午後2時、深圳市の隣町である、トンカン市に立地する万宝路（マブチ）株式会社の工場を訪問した。電子部品の1つでもあり、自動車の起動装置の一つでもあるミニモーターを製作している会社であるが、日本人駐在員は10数名で、それに加え常時日本から出張の形で20名ほどの社員が常駐している。出張扱いを取るのには、税制面の問題と、必要に応じて日本から社員を派遣す

るという同社の方針のようである。現地従業員と日本人幹部とはほとんど日常的な接触はないようであり、終業後は日本人同士で食事を取るとのことである。従業員の採用は、現地の採用会社に依存しているため、出身地ごとに従業員がグループを作るといったこともないとのことであった。

3月21日、香港を経由して、日本に帰国した。

今回の調査は、中国南部の大都市に居住する朝鮮族及び日系会社で働く中国人従業員の同郷意識に関するものであったが、調査時間が限られていたこともあって、まだ十分な結論ないし仮説を提示するに至っていない。今後の再調査に俟つこととしたい。

(4) 韓国・巨済島，釜山市調査

アジア文化研究所 研究員 松本 誠 一
客員研究員 井出 弘 毅

期 間：2012年8月8日～16日

出張先：大韓民国（巨済市，釜山広域市）

韓国・コジェ（巨済）島の長老派キリスト教会と、コジェ島と日本との関わりを中心に調査を行った。そのため昨年と同様、島の中心地であるコヒョン（古縣）ではなく、日本に近い側の港の1つであるチャンスンポ（長承浦）をベースにした。

また当初はヨス（麗水）にて開催された世界博覧会（テーマ「生きている海，息づく沿岸」）を見学する予定であったが、時間の関係から予定を変更し、コジェ島の北側の対岸地域（マサン（馬山），チャンウォン（昌原），チネ（鎮海））を訪れた。これらの地域も、コジェ島と同様、豊臣秀吉による朝鮮侵略の際に築かれた倭城跡や、植民地時代の日本式家屋が数多く残り、かつて日本との関係が深かった場所である。

調査日程は以下の通りである。

8月8日

空路釜山に入り、金海国際空港からバスにてコジェ島のチャンスンポに直接向かった。

8月9日

コジェ文化院を訪問。その後コジェ造船海洋文化館（漁村民俗展示館，造船海洋展示館）を見学。さらに仏教施設 A 庵にて聴き取り調査を行なった。

8月10日

サムソン（三星）造船所を見学。その後 B 教会にて B 牧師夫妻からこの2年間（※詳細は後述）の教会の様子などについてお聴きする。同じ長老派の他教会の牧師達と合流し、トンヨン（統営）市のハリヨ（閑麗：ハンサンド（閑山島）からヨス（麗水）に至る）海上国立公園等を見学。

8月11日

マサン駅，チャンウォン市立マサン博物館を見学。その他統一館，チャンウォンの家，チャンウォン歴史民俗館，チネ楼などを見学。

8月12日

B教会において日曜礼拝に参加・観察。その後信徒らと共にC教会にて解放67周年記念礼拝に参加・観察。ヌンボ（菱浦）に移動し、日本式家屋などを見学。書店にてコジェ市地図を購入。

8月13日

かつて対馬との間を船で行き来した経験を持つというインフォーマントD氏宅にて聴き取り調査。

8月14日

同じ長老派のE教会、F教会を訪問し、牧師から教会の動向などについてお話をうかがった。

8月15日

バスで釜山へ移動。朝鮮通信使歴史館、トンネウッソンイムジンウェラン（東萊邑城壬申倭乱）歴史館を見学。書店にて書籍調査。釜山浦民俗博物館を見学。

8月16日

空路にて成田へ帰着。

8月8日から14日までコジェ島調査、15、16日に釜山調査を実施した。

今回の調査では格安航空会社便のエア釜山を初めて利用した。成田から金海国際空港に入り、バスにてコジェ島の日本側に位置するチャンスンポに直接向かった。2010年12月に釜山からコジェ島へのコカ（巨加：コジェ島と加徳島を結ぶ）大橋が開通し、釜山からコジェ島への定期旅客船は廃止された。昨年調査では空港からコジェ島の中心地であるコヒョンを経由してチャンスンポに向かったが、今回は空港からチャンスンポへの直行バスを利用した。空港から約50分でチャンスンポの市外バスターミナルに到着した。

これまでの調査では毎年8月下旬にスケジュールを設定していたが、今回は8月12日にヨス万博が閉幕するため、それに合わせて8月上旬にスケジュールを組んだ。時期が早いことにより海水浴客が多いためか、前回利用した宿が満室のため予約できず、今回はより海に近い別の宿を利用した。

翌9日には毎年訪れているコジェ文化院を訪問した。文化院長から最新のコジェ文化研究の動向について聴き、今回の調査の目的、概要、滞在予定などを説明して、いろいろと助言を得ることができた。後述するが、コジェー対馬関係現代史に関わる人物に関する情報は大変有用であった。昨年の調査後に刊行された『巨済文化6』を贈呈して頂いた。このシリーズは文化院の郷土史研究所が執筆したもので、今号は島文化と題し、ネド（内島）、ウェド（外島：冬のソナタの最終回のロケ地）、チョド（猪島）、チシムド（只心島：昨年訪問した）に関する論稿が収録されている。

その後コジェ造船海洋文化館（漁村民俗展示館（写真①）、造船海洋展示館（写真②））を見学した。事前に宿の方から「テマド（対馬島）が見える家」というものがあるとの情報を得ており、立ち寄った。しかし従業員から聴いたところでは、天候が良ければテマドが見えるということであり、残念ながら今回見ることはできなかった（写真③）。

その帰り道の途中でバスまでの時間がかかなりあったため、近くにあった仏教施設A庵に立ち寄った。このA庵にはたまたま立ち寄ったが、快く対応してくれた高齢の女性ボサルニム（菩薩様：僧侶や尼僧でなく、仏教に造詣深い信徒代表の様な婦人）から話を聴くことができた。彼女の亡くなった夫は植民地時代に日本に留学して電気工学を学び、1959年に韓国で初めての真空管ラジオを開発した金星社（現LG電子）の技術者であった。長女がこの父親の書いた日記を元にして『父

のラジオ』という本(写真④)を出版し、それを元にしたテレビドラマも放映されたとのことであった。日本との関係のあるコジェ出身の技術者に関する新たな情報を得ることができた。

10日には例年お世話になっているインフォーマントのB牧師にお願いしてサムソン造船所(写真⑤)を見学した。わずか20分のバスによる一般見学会であったが、世界有数の規模を誇る造船所の一端を見ることができた。その後コジェ市の中心部に近いB教会へ移動しB牧師夫妻からこの2年間の教会の様子などについてお聴きした。この2年間というのは、去年はB牧師が安息年(サバティカル)であり、我々の調査期間中牧師夫妻はヨーロッパ旅行に出かけるとのことであることができなかった。そのため去年の調査ではあらかじめB牧師にお願いしてB教会の長老夫妻からお話を聴いた。来年には教会の建て直しが行なわれるとのことで、100年を超える歴史あるこの教会も大きな節目を迎えることとなる。また同じ長老派の他教会の牧師達と合流し、トンヨン(統営)市のハリョ(閑麗:ハンサンド(閑山島)からヨス(麗水)に至る)海上国立公園を見学した(写真⑥)。

先述した通り、今回の調査時期の変更はヨス万博に合わせたものであった。しかし11日にコジェ島の中心地であるコヒョンの市外バスターミナルを経由してナムマサン(南馬山)へと移動した段階で、ヨス行きのバスが少なく、行ったとしてもほとんど見学する時間がないことが分かり、急きょ予定を変更して、コジェ島の海を挟んで北側に位置する地域を初めて回ることとした。マサン駅、チャンウォン市立マサン博物館を見学した(写真⑦)。旧マサン市は2010年にチャンウォン市に合併され、現在はチャンウォン市の2つの区となっている。旧チネ市も同様にチネ区としてチャンウォン市に併合されている。このチャンウォン市には慶尚南道庁がある。この博物館は高台の上にあり、そこから下る途中で日本式の階段と門(写真⑧)を見つけた。おそらく植民地時代には頂上に日本の神社があり、そこへの階段と門であると思われる。その他にも日本式家屋などを多く目にし、コジェ島と同様、日本との関係の深い地域であったことがうかがわれた。その後、北朝鮮の生活に関する展示がされていた慶尚南道統一館(写真⑨)、朝鮮時代の伝統的家屋を保存してあるチャンウォンの家(写真⑩)、それに併設されたチャンウォン歴史民俗館、ベトナム戦争に従軍した韓国軍部隊を記念する海外参戦記念塔(写真⑪)、海に面したチネ楼(写真⑫)などを見学した。

調査前にインフォーマントであるB牧師にB教会(写真⑬)での日曜礼拝への参加をお願いしておいた。これまでは牧師家族、長老夫妻、執事にお会いして話を聴いてきたが、初めて12日の日曜礼拝に参加して一般の信徒達と会い観察を行なった。礼拝後は信徒達と食事を共にし、教会の概要について信徒役職者からの話をいろいろと聴くことができた。その後信徒達と共に教会のバスでコジェ市の東部に位置するC教会(写真⑭)へと移動し、11教会連合「光復67周年記念礼拝」に参加、礼拝の様子を観察した。このC教会は大聖堂を備えており、B教会よりも格段に規模が大きい。開会前には壇上にてバンド演奏が行われ、参加者全員が曲に合わせて神への感謝の歌を歌った。この教会に所属するコジェ市長やコジェ島出身の国会議員等の来賓の参加もあり、盛大な礼拝であった。ちょうどこの2日前にはイミョンバク(李明博)大統領の竹島(韓国名:トット(独島))初上陸があり、前日にはロンドンオリンピックの韓国男子サッカー代表が3位決定戦で日本代表を破って初めての銅メダルをとり、試合後の韓国代表選手による領土問題に関するパフォーマンスがあった。日本による植民地支配からの解放を記念する礼拝ということもあって、牧師の説教や来賓のあいさつの中には、韓国選手の活躍を宣揚し、日本を非難する内容が多く確認できたが、かつてのナショナリズム一辺倒ではなく、そこにはトランスナショナルな関係性の広がりを見てとることができた。

礼拝観察後バスにてチャンスンポから海に向かって突き出した先にあるヌンポ(菱浦)へと移動し、日本式家屋(写真⑮)などを見学、書店にてコジェ市の地図を購入した。この書店の店主とは

以前の調査時にも会っており、我々のことも覚えていた。

13日には先述したコジェ文化院長から情報を得た、コジェー対馬関係現代史に関わる経験を持つというインフォーマント D 氏宅を訪ねた。何人かに尋ねながら歩いて当該個人宅を特定し、聴き取り調査を行なった。結果として当時の D 氏個人についての話はほとんど聴くことができなかったが、植民地時代にその付近に住んでいた日本人の名前などについての情報を得ることができた。これは今後の調査の重要な手掛かりとなる。

14日はインフォーマントの B 牧師の B 教会と同じ長老派である E 教会、F 教会を訪問した。これらの教会はコジェ市の西部に位置している。そこの牧師達から教会の動向などについていろいろとお話をうかがった。教会の規模としては、C 教会、B 教会に次いで、E 教会、F 教会という順であり、教会の規模、信徒数、歴史、建物の広さなどそれぞれ違いがあるが、規模に応じた教会運営の様子的一端を見ることができた。

15日は韓国ではクエンボッチョル（光復節）と言い、日本による植民地支配から解放された記念日である。バスで釜山へと移動する道すがら、道路脇にはテグッキ（大極旗）2つが1セットとなったものがはためいていた。他には街は特別普段と変わったところはなかった。

釜山ではまず、昨年できた朝鮮通信使歴史館（写真⑯）を見学した。朝鮮通信使とは、李氏朝鮮から江戸幕府に対して1607年から1811年までに12回送られた使節団のことである。歴史館の入口右側には日本の各地に伝わる朝鮮通信使の人形が展示されていた。これまで釜山における朝鮮通信使関係のものといえば、国際旅客ターミナル近くの朝鮮通信使が描かれた壁画のみであったため、ようやくまとまったものができたという感が強い。展示は子どもにも分かりやすいようにタッチパネルで簡単に操作できるよう工夫されていた。

次にこれも昨年できたトンネウァソン（東萊邑城）イムジンウェラン（壬申倭乱：日本では文禄・慶長の役）歴史館（写真⑰）を見学した。これは戦いのあったトンネウァソンの城跡である。2005年の地下鉄駅工事の際に発見された城の堀から大量の遺骨や武器等（写真⑱）が出土し、地下鉄スアン（寿安）駅構内に歴史館として建設されたものである。8月15日という日に友好と戦争という対照的な2か所を訪れることができた。

続いて書店にて書籍調査を行ない、釜山浦民俗博物館（写真⑲）を見学した。ここは雑居ビルの1フロアに、釜山の家庭で使用されていた物品を中心に展示してあった。

当初はこの日、研究協力者の崔仁宅・東亜大学教授（社会人類学・民俗学）と会う予定であったが、先方に突然の用事が入ったとのことで、残念ながら会うことはできなかった。

今回の調査では、これまで継続して調査してきたキリスト教会について、より踏み込んだ調査ができたこと、今後他教会への調査の拡大も十分期待できること、そして日本との関係において重要な情報を得られたことが大きな成果であった。またコジェ島の北側にある日本との関係の深い地域も見ることができた。今後はこれらの成果を元に調査を深化・拡大する予定である。



写真① 【コジェ島】コジェ漁村民俗展示館



写真② 【コジェ島】コジェ造船海洋文化館



写真③ 【コジェ島】「テマド（対馬島）が見える家」から対馬方向を望む。中央の島はチシムド（只心島）。天気が良ければ、この島の後ろに対馬が見えるとのことである。



写真④ 【コジェ島】仏教施設K庵のボサルニム（菩薩様）の夫の日記を元に長女が執筆した本。



写真⑤ 【コジェ島】サムソン造船所



写真⑥ 【トンヨン市】ハルリョ（閑麗）海上国立公園の多島海



写真⑦ 【マサン】チャンウォン市立マサン博物館



写真⑧ 【マサン】日本植民地時代の階段と門



写真⑨ 【チャンウォン】慶尚南道統一館



写真⑩ 【チャンウォン】チャンウォンの家



写真⑪ 【チネ】海外参戦記念塔



写真⑫ 【チネ】チネ楼



写真⑬ 【コジェ島】B教会



写真⑭ 【コジェ島】C教会



写真⑮ 【コジェ島】ヌンボの日本式家屋



写真⑯ 【釜山】朝鮮通信使歴史館



写真⑰ 【釜山】トンネウッソンイムジンウエラン歴史館



写真⑲ 【釜山】釜山浦民俗博物館



写真⑱ 【釜山】同，内部の堀の跡。

(文・写真 井出弘毅)

(5) シンガポール調査

アジア文化研究所 研究員 山 本 須美子

期 間：2012年 8 月26日～28日

出張先：シンガポール

今回のシンガポール訪問の目的は、外国人留学生による大学の国際化に関する文献収集と聞き取り調査であった。8月21日から25日のインド・ニューデリー滞在後、25日深夜にニューデリーを発ち、26日午前7時半に予定通りシンガポールに到着した。ホテルで休息後、中華街を散策をし本屋で関連書籍を収集した。

27日は、午前9時半に国立シンガポール大学 Lee Kuan Yew School of Public Policy（リークワンユー公共政策大学院）Dr. Mukul Asher を訪問し、同大学院の外国人留学生受け入れの現状について話を伺った。現在同大学院約300人の院生の内5分の4は外国人留学生であることがわかった。外国人留学生増加の経緯や、人気のある専攻分野について具体的な情報を得た。なお、シンガポールには外国人留学生の統計的資料はないこともわかった。

午後は、Asian Civilizations Museum を訪れた。東南アジアを中心とする芸術や宗教等の分野も含む歴史に関する展示はかなり見応えがあり、アジアの小国であるシンガポールの歴史を「アジア」という包括的視点から把握させるものであった。

28日は、10時半にJETRO シンガポールのオフィスで、椎野幸平氏と面談した。シンガポールが日系企業のアジア進出の拠点となっていることについてまずお話を伺った。その後で、昨日訪問した国立シンガポール大学 Lee Kuan Yew School of Public Policy が、ASEAN 諸国の官僚子弟の留学先となり、高級官僚の人材ハブとしての役割を果たしているという大変興味深い情報を得た。アメリカの大学院ではなく、シンガポールにおける大学院が、ASEAN 諸国の高級官僚次世代のネットワーク形成にも一役を担っていることもわかった。また、外国人留学生だけではなく、観光振興や国際コンベンション誘致などによる外国からの訪問者増加についても話を伺った。

28日深夜の飛行機に乗り、29日午前8時に成田に帰国した。

今回のシンガポール訪問は2泊3日の短い期間であったが、シンガポールにおける外国人留学生受け入れの現状を、その中心的役割を担っている国立シンガポール大学 Lee Kuan Yew School of Public Policy を中心に情報を収集することができた。海外企業のアジア進出の拠点となっているシンガポールは、様々な局面において外国人受け入れに積極的であり、高等教育への外国人留学生受け入れもそうした国際化推進の一局面として位置付けることができることがわかった。



写真：Lee Kuan Yew School of Public policy 玄関での
Dr.Mukul Asher と筆者

(8)「東南アジアの海とひと」研究会の共催

アジア文化研究所 研究員 長 津 一 史

期 間：2012年10月14日～15日

出張先：静岡県静岡市

長津は、静岡県静岡市清水区東海大学海洋学部において、「東南アジアの海とひと」第6回研究会を開催した（本研究所プロジェクトが共催）。本研究会においては、小野林太郎（東海大学海洋学部）、鈴木佑記（日本学術振興会特別研究員PD）、長津一史（東洋大学社会学部）の3人がそれぞれ、「東南アジア・オセアニア海域世界におけるヒトの移住史——マルク諸島の事例を中心に」、「空間をめぐる交渉——タイ海洋国立公園におけるモーケンの漁撈活動に注目して」、「クレオール海民とその言語実践——インドネシア・カンゲアン諸島のフィールドワーク報告として」について報告した。これらの報告に対し、立本成文（総合地球環境学研究所）、川崎一平（東海大学海洋学部）が、それぞれ地球地域学、海洋人類学の立場からコメントを加えた。各報告は、自らの長期かつ往還的なフィールドワークに基づいて、東南アジアの海域世界を境域という概念で捉え、その歴史的持続性と空間的普遍性を問うものであり、海域・海民研究の展開のためにきわめて高い意義を持つものであった。コメンテータのコメントは、それらの概念の精密さを問いつつも、地域間比較研究への応用可能性を指摘するなど示唆に富むものであった。研究会には、生態研究を含む様々なディシプリン背景を持つ17人の研究者が参加し、ディスカッションでは、東南アジアを主とする海の境域・跨境コミュニティ研究へのトランスディシプリナリーなアプローチの可能性が検討された。

Ⅲ 《研究成果》

植野 弘子

2012『『民俗台湾』にみる日本と台湾の民俗研究——調査方法の検討を通じて』『東洋大学社会学部紀要』(50-1)：99-112.

後藤 武秀

2012「中国大陆人民と台湾人民の交流に伴う法的問題の一齣——中国大陆における離婚関係書類の台湾における適用」『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』(46)：19-22.

小林 正夫

2013, “Structural Change of Population of Nepal: From Preliminary Result of 2011 Population Census,”『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』(本号別掲)

長津 一史

2012「2000年センサスにみるインドネシアの民族状況」鏡味治也編『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』木犀社, pp.37-48.

2012「異種混雑性のジェネオロジー——スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」鏡味治也編『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』木犀社, pp.249-284.

2012『『海民』の生成過程——インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として』『白山人類学』(15)：45-71.

松本 誠一

2012「巻頭言 島嶼コミュニティ研究について」『島嶼コミュニティ研究』(1)：1-2.

2012「高齢者の多い地域社会における共同——八丈島と奥会津山村の比較を通じて」『島嶼コミュニティ研究』(1)：34-60.

2012「対馬島と向かい合う韓国・巨済島のコミュニティについて」『島嶼コミュニティ研究』(1): 72-73.

宮下 良子

【著書】

2011「경계를 넘는 사머니즘——재일 한국인 1세대 여성의 사례 연구로부터」『경제초월자와 도시연구——지구화 시대의 매체, 이주』共著: ソウル市立大学校・都市人文学研究所, pp.167-186.

2012「第2章 四半世紀後の神々の諸相 第6節 在日コリアン寺院」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社刊, pp.173-184.

2012「第3章 生駒の新たな神々 第1節 在日コリアン寺院の新たなアクション——その先へ」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社刊, pp.187-214.

2012 飯田剛史・宮下良子・柴田悠・白波瀬達也「第1章 生駒の神々再訪 第2節 石切周辺」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社刊, pp.33-53.

2012「在日コリアン寺院—ローカリティ／トランスナショナルリティの視座から」大谷栄一・藤本頼生編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 第二巻 地域社会をつくる宗教』明石書店, pp.94-119.

【学術雑誌等に発表した論文】

2011 全泓奎・川本綾・本岡拓哉・宮下良子・李度潤・福本拓・中山徹・水内俊雄「社会的な不利地域における共生型まちづくりに関する研究——在日コリアンコミュニティの地域再生と居住支援」『住宅総合研究財団研究論文集』(37): 49-60.

2012「報告2 在日コリアン寺院——世代交代によるネットワークの生成」「宗教と社会」学会2011年度学術大会・テーマセッション記録, 「『生駒の神々』再訪——後期近代の視点」『宗教と社会』(18): 116-118.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

2011「＜都市空間＞に創出される在日コリアン寺院のネットワーク」『大阪市立大学都市研究プラザ G-COE 特別研究員 研究発表会 第2回』, 高原記念館

2011「在日コリアン寺院——世代交代によるネットワークの生成」テーマセッション『「生駒の神々」再訪——後期近代の視点』, 「宗教と社会」学会第19回学術大会, 北海道大学

2012「海峡をまたぐコリアンの移動の〈点と線〉——下関, 釜山の事例から」『第6回アジア文化研究所年次集会』, 東洋大学

2012「特別企画 書評会: 宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』(創元社刊, 2012年)」『「宗教と社会」学会 2011年度・関西地区大会』, 佛教大学

2012「在日コリアン寺院——都市空間に生成される宗教ネットワーク」, 日本民俗学会第64回年次大会, 東京学芸大学

2013「在日コリアン寺院——グローカリズムの視点から」, 慶應義塾大学 東アジア研究所プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容——『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」, 研究例会6, 慶應義塾大学

【報告書】

2011『「龍王宮」の記憶を記録するために——済州島出身女性たちの祈りの場』こりあんコミュニティ研究会『「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト』, pp.82-87.

2011「研究所プロジェクト『アジア境域における跨境的生活様式の研究——東アジア・東南アジアの比較——』計画による調査・活動報告——下関市の在日コリアンおよび韓国・釜山市における日本からの引揚者を対象として」『アジア文化研究所研究年報』(46): 14-18.

【雑誌】

2011「在日演劇論④ 在日の自画像——映画『月はどっちに出ている』から」『Sai』(65): 33-35.

2011「在日演劇論⑤ 生きていく場所」『Sai』（66）：48-50.

2012「在日演劇論⑥ 巡りくる春——映画『春夏秋冬そして春』から」『Sai』（67）：48-51.

2012「在日演劇論⑦ 声の束——つかこうへいの『ロマンス』から李鳳宇の『EDEN』へ」『Sai』（68）：27-29.

水谷 裕佳

【著書】

2013, "Indigenous Peoples and Borderlands", Elliott Barkan ed. *Immigrants in American History: Arrival, Adaptation, and Integration*, Santa Barbara: ABC-CLIO.

【論文】

2012「自己書評 『先住民バスクア・ヤキの米国編入——越境と認定』」『ラテンアメリカ・カリブ研究』（19）：17-19.

2012「19世紀の米国テキサス州における先住民ヤキの住居および墳墓跡に関する研究」『高梨学術奨励基金年報 平成23年度研究成果概要報告』, pp.329-336.

【学会発表】

2012「現代の「米国先住民」という枠組み——保留地および都市先住民のコミュニティの比較による一考察」, 白山人類学研究会, 東洋大学白山キャンパス.

2012「先住民と海外における博物館展示——北米大陸のヤキに関する展示を事例として」, 日本文化人類学会第46回研究大会, 広島大学.

2012, "Exhibiting Visible and Invisible Aspects of Cultures and Histories on the Borderland: Representation of the Yaqui Culture and History in Museums", Border Regions in Transition, 福岡国際会議場.

山本須美子

2012「中国系コミュニティの変化と学校適応・不適応——イギリス・フランス・オランダの比較から」『神奈川大学評論』（73）：104-113.

渡邊 暁子

2012「フィリピン・マニラにおけるムスリム・コミュニティの形成過程」学位論文。博士（地域研究・京都大学）, 2012.

福建省アモイと台湾の城隍廟を通じた宗教文化の交流

後 藤 武 秀

1 はじめに

1949年に成立した中華人民共和国は史的唯物論をその理論的基礎としたので人間の精神生活に関わる部分、特に宗教を禁圧した。反右派闘争、文化大革命と続く革命の過程で宗教施設が破壊されたことは誰しもよく知るところである。中華人民共和国建国以前の中国特に南部においては道教と仏教が混融した祖先崇拜が精神生活の中心であり、様々な神を祭祀する廟、あるいは祖先を祭祀する祖廟が随所に存在していた。福建省では、対岸の台湾に渡航する者が多くいたこともあり、航海の安全を祈願するために立てられた湄州の媽祖廟をはじめ、天后宮など多数の廟が建てられている。これら福建省に多数存在してきた廟もまた革命の中で有名なものを除き多くが破壊された。

しかし、文化大革命が終わり、鄧小平の登場によって改革開放政策が実施されると、経済の自由化だけでなく精神活動の自由化をも惹き起こした。さらに信教の自由が制度上保障されるようになると、数十年間表面化することを許されなかった廟を中心とする文化もまた、中国、とりわけ本年度筆者がフィールドとしている福建省では随所に復活してきている。今日、福建省のアモイ市を歩くと、2000年に再建された思明区店上東里の興隆宮など近々10数年ほどの間に建立された廟があちこちに見受けられる（写真1）。観光客でにぎわう第1港のすぐそばには、再建されたばかりの帆礁宮が見られる（写真2）。本小稿では、このような廟を中心とする宗教文化を台湾との交流の拡大という視点から見てみようと思う。

2 アモイ市の概要と人口

アモイ市は、中国福建省南部の都市である。アモイ島とその周辺の地域が市域である。アモイ島内には思明区、湖里区の2つの区があり、その周辺の中国本土には海滄区、集美区、同安区、翔安区の4つの区がある。合わせて6区から成り立っている。漳州市と泉州市がアモイ市に接している。福佬と呼ばれる日本統治時代以前から台湾に居住する台湾人のルーツとして、漳州人か泉州人かということがよく言われ、また福佬の多くがこの2つの地域の出身者であることから、この両地域に挟まれたアモイ市は、これらの地域と並んで台湾人のルーツの1つと言われる。もっとも、清朝時代末期まではアモイはこれらの地域と比べて格段に発展していたわけでも人口が密集していたわけでもない。アモイが発展するのはアヘン戦争後の南京条約によって開港され、さらに1902年に共同租界が設けられ、外国との交流窓口になったことが契機である。さらに、中華人民共和国となってからは、改革開放政策により中国最初の経済特区の1つに指定されたことが今日の発展の契機となっている。

2010年11月1日に行われた第6回国勢調査によればアモイ市の人口は353万人余であり、アモイ島にある2つの区に186万人と、約半数が居住している。2000年11月1日に行われた第5回国勢調査の時の市の人口が205万人強であったので、この10年の間に150万人近く増加している（アモイ市2010年第六次全国人口普查主要数据公报，2011年6月11日，アモイ統計信網所載）。2012年の現段階では、353万人よりもさらに増加していると推測される。なお、国勢調査においては、短期居住

を目的とする外国人は調査対象に含まれていないので、台湾籍の人々、すなわち台湾人がどの程度居住しているかは判然としない。というのも、台湾人の場合、いわゆる台商ビザを取得して中国大陆でビジネスに従事するならば、随時往復が可能であるので、事実上中国大陆に居住していても居留人口に含まれないからである。

3 アモイ市と台湾との交流

アモイ市は、台湾に存する中華民国支配下の金門島と小金門島を対岸に見る。アモイ島から小金門島までは直線距離にしてわずか5キロメートルである。また、翔安区の大嶝島から金門島までも5キロメートルと指呼の間にある。1958年に金門島侵攻を試みた中華人民共和国軍と中華民国軍の砲戦が行われたことからわかるように、改革開放政策が行われる1979年までは両国の軍事対立の最前線であった。今日では、小三通から三通へと交流が発展した両国関係の最前線に位置している。アモイ市の東渡港と五通港の2か所の埠頭から金門島水頭港に向けて毎日10便の客船が運航されている。大陸側からは、30分ほど船に乗り、金門島に到着後航空会社のバスに乗り換えれば20分ほどで金門飛行場すなわち尚義飛行場に到着する。ここから台湾の国内線で、台北、台中、嘉義、台南、高雄に行くことができる。逆に台湾側からも同様のルートでアモイに到着することができる。2008年に台湾側で国民党政権が復活してからは中国大陆との関係改善が一段と進み、中国大陆と台湾との間に直行便が就航するようになり、アモイの高崎飛行場からも台湾行の直行便が就航している。さらに、福州の長楽飛行場からも台湾への直行便がある。これらの直行便は、台湾の桃園飛行場だけでなく、松山飛行場、台中、高雄などへも飛んでいる。本年度上半期の統計によると、福建省と台湾の間に1月から6月までの間に3004便の直行便が運航され、38万5千7百人が往来した（中国新聞網2012年7月26日による）。香港経由、上海経由の便による移動数は把握できないが、便数から見ると相当数がこのルートでも移動しているとみてよい。こうした航空機による移動は時間の節約にはなるが、若干費用が高いこともあり、上述の金門島経由の船便と台湾の国内線航空機を併用する方法で、連日多数の人々が移動している。

現在、中国大陆側と台湾側との関係、特に福建省と台湾との関係は兩岸関係と一般に呼んでいる。台湾海峡を挟んで西と東に分かれていることから、大陸側を海西、台湾側を海東と呼ぶこともある。この兩岸の関係は、特に経済関係の拡大が今日的課題となっており、アモイ市側では様々な兩岸関係の密接化を促進するための活動が展開されている。特に、台湾からの投資を目的とした展示会は数多く開催されており、なかでも例年9月に開催される海峡フォーラムでは、アモイ市の会展中心（パビリオン）等市内の各施設を利用して兩岸双方の商品の商談会が大規模に行われるだけでなく、文化・芸術・学术交流の機会も多数設定されている。厦門大学台湾研究院でもこの機会に合わせて台湾側から研究者を招き、學術討論会を開催している。本年度の共通テーマは日本統治時代の台湾文化であった。海峡フォーラムの期間中にアモイに渡航した台湾人は、7千人に上ると言われている。

このような兩岸の交流は必然的に双方の文化に影響を与える。宗教に関連する文化も多分に台湾の影響を受けている。文化大革命の洗礼を受けた中国では祖先祭祀の施設である墳墓や祖廟は唯物論に反するものとして破壊された。福建省においても同様で、古い時代の祖廟はほとんど見ることができない。しかし、文化大革命が終わり改革開放政策によって精神文化の開放も進むようになると、福建省のあちこちで伝統的な祖廟や土地公の再建や建造が行われるようになってきた。今日、アモイ市の随所に廟を認めることができるし、洪文地区には真新しい洪氏祖廟が建設されている（写真3）。泉州市など福建省の各地で同様に廟を見ることができる。

4 城隍廟の交流

そのような廟の一つがアモイ市の城隍廟である（写真4）。アモイ城が建設されたのは明の洪武20年（1387年）であり、それと同時に城隍廟がアモイ城南門の城内に建立された。今の厦門大学第1病院の立地するところである。しかし、20世紀に入ると打ち続く戦乱のために破壊され、70年代に入ると都市建設のために完全に破壊されてしまった。

1990年代末より城隍廟の再建に取り組んだのが呉天発氏らである。呉氏は建設業に従事していたが、その傍ら城隍廟の再建に熱意を燃やし、自ら仕事の合間に廟の建設を手掛け、有志の拠金も得て、数年の日月を費やして今日の城隍廟を作り上げた。アモイ大学からそう遠くない南華路という小さな路地を入ると、自動車整備工場の敷地の裏手に城隍廟がある。そこには台湾の国民党の行政院長であった呉伯雄の筆になる扁額が掲げられている。

アモイ市の城隍廟が復興されたことは、市民に歓迎されただけでなく、兩岸の宗教文化交流の大きな契機ともなった。本年4月30日、アモイ市の対岸の金門島で兩岸三地金門迎城隍の式典が開催された。三地とは、アモイ、漳州、台湾を指すようであるが、実際には台湾海峡を挟んだ兩岸を意味している。福建省と台湾各地の城隍爺が一堂に会するのは今回で6度目であり、昨年は福州で開催された。今年、金門島で開催されたのは、金門島最大の城隍廟である浯島廟の遷治、すなわち建設332周年を祝してのことである。大会は、金湖鎮の伍徳宮を会場として、福建省、台湾から22の城隍廟の関係者が集結して行われた。福建省からは、アモイのほか、漳州、長楽などから参加、台湾からは、台湾最大の城隍廟と言われる新竹、台湾省の城隍廟である台北をはじめ、嘉義、基隆などから参加した。廟の祭礼では笛、太鼓、鐘でにぎやかに音楽が演奏され、爆竹が鳴らされる。牛將軍、馬將軍に扮した信者が練り歩く。台湾ではこうした行事は普通に行われており、金門島の祭礼でも参加した台湾各地の城隍廟は城隍爺を輿に乗せて練り歩き、牛將軍等も練り歩いた。しかし、アモイからの参加者は城隍爺を輿に乗せて練り歩き、笛、太鼓、鐘もにぎやかに演奏したが、牛將軍などは揃っていないことから、持参していなかった。各地の城隍廟からの参加者が順次練り歩いて祭礼は終わり、夕刻は参加者全員による宴会である。そこでも様々な交流が行われた。その様子はDVDに収録され、誰でも見ることができる。

5 宗教交流のもたらすもの

台湾では、日本統治時代もその後の国民党による一党独裁時代も、宗教活動が制限されたことはなかった。特に、土俗の宗教ともいえるべき道教と仏教の混融した廟の文化は、台湾人の心のふるさとともいえるべき性格を持っている。というのも、こうした廟には必ず祀られている媽祖は航海の安全の守り神として、福建省等から台湾海峡を渡って台湾に新天地を求めて渡航してきた祖先をもつ台湾人は、たとえ自らがキリスト教等他の宗教の信者であっても信仰しているからである。さらに、平安と死後の審判を司る城隍爺もまた、同様に台湾人の厚く信仰するところである。

これに対して、中国では、宗教の自由ないしは、宗教活動の自由が長く禁じられてきたこともあって、道教と仏教の混融した廟の信仰も事実上禁止されてきた。さらに、近年では都市化の進展に伴う危険性から爆竹も禁止されている。アモイ市でも同様であり、1997年に爆竹を禁止する条例が制定されている。中国の大都市では春節に限って爆竹を一部許可するなど伝統文化復活の兆しが見えはするが、しかし、大部分の都市では依然として禁じられている。爆竹は、邪気を払うものであり、台湾では毎月行われる土地公の祭事や鬼月の行事など、日常生活に密着したものとなっている。このような漢族伝統の祭礼が中国に復活するのかどうかは定かではないが、少なくとも廟を通じた宗教文化の交流が進展していくと、徐々にではあろうが、伝統的な宗教文化行事も復活してい

くのではないと思われる。台湾に維持されてきた廟の伝統的宗教行事がそれに影響を与えていることは間違いのないところである。



写真1 新たに建立された廟



写真2 帆礁宮



写真3 洪氏祖陵



写真4 廈門城隍廟